

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

日本語の文体・レトリック辞典

中村 明著 長年、日本語の文体論・表現論を研究してきた著者による本格的な日本語のレトリック・文体論辞典。約一〇五〇項目を収録し解説定価三三六〇円

(価格は税込)

平家物語を知る事典

日下・鈴木・出口著「平家物語」をあらゆる「名場面・登場人物」に分けて平易に解説し、書誌的解説と系図や合戦地図を加え核心に迫る。CD付。定価二九四〇円

勘違い敬語の事典

奥秋義信著 TV・ラジオ番組の中で使われている敬語の誤用を、実例をあげながら正しい敬語の使い方を示す。13型に分類して誤用を正した。定価一八九〇円

中世のことば辞典

「鎌倉遺文」にみる ことばの中世史研究会編 古文書の中に出てくる言葉約一五〇語選び中世での意味・用例の初出・その変化などを解説したはじめての国語辞典。定価二二五〇円

CD-ROM版 くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆定価二九四〇〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
<http://www.tokyodoshuppan.com>

萬葉集全歌講義

第二巻(巻56) 全十巻
阿蘇瑞枝 A5並 1200円
国語学考古学ほか、諸分野の研究成果をふまえた総合的古代研究。

古今集校本

新装ワイド版
西下経・滝沢貞夫編 B5並 9975円

梅沢本を底本に諸本70本を校合。各首毎に校合本を測れる至便の名著。

新源氏物語は読んでいるのか

帯木三帖六条院・玉響 望月郁子 A5並 3465円

『女人往生』『女人成仏』から、新たな解釈を提示する野心作。

稲賀敬二コレクション

④後期物語への多彩な視点
全6巻刊行中/ A5並 8400円

国文学界に鮮明なインパクトを与えた著者の単行本未収録論考群。

西行和歌と仏教思想

金任伸 A5並 9975円

「釈教歌」から窺える仏教思想を解明。求道者としての西行像を探る。

今井源衛著作集

第12巻 評論随想
武谷惠美子編集 A5並 14700円
文学研究の混沌の時代を切り拓くための示唆に満ちた論考群。

文机談全注釈

岩佐美代子 A5並 12600円

平安初期から鎌倉後期に至る雅楽、特に琵琶の歴史を、親しみやすい説話の形で物語った、類例のない貴重な文学作品を全注釈。翻刻・現代語訳対照の読みやすい二段組みで、その全貌を明らかに。

京極派歌人の研究 新装版

京極派和歌の研究 改訂新装版 A5並 14700円

岩佐美代子著 二点重版！

西鶴と浮世草子研究

第二号◎特集 怪異

高田衛・有働裕 A5並 2625円

佐伯孝弘編 A5並 2625円

人々は怪異譚を追い求め、作者たちはそれを提供した。江戸期に挿曳しつづけた怪異をあらゆる角度から論じ尽くす。豪華冊談、高田衛×小松和彦×長島弘明 豪華特典CD収録・「怪異物挿絵大全」(佐伯・近藤編)・杉本好伸編「武太夫物語絵巻」(歴博蔵) 堤邦彦・有働裕編「江戸の怪異スポット」他。

笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-3 電話03-3295-1331
<http://www.kasamashoin.jp/> ファクス03-3294-0996 (価格は税込)

ISSN 0452-3016
雑誌 03787-12



4910037871275
01524

Printed in Japan

國文學

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇七年 第五二巻十五号

解釈と教材の研究

平家物語

特集

世界への発信



學燈社

第五二巻十五号 二〇〇七年十一月号

心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず
本莊雅一

第三回 心意伝承とは何か③道徳発生の源流—折口信夫の気概—

民間伝承の性能分類

柳田国男・折口信夫といえは、日本民俗学を創始した双子の師弟のように思われがちだが、両者の研究表現の仕方は、かなり趣を異にする。特に、民間伝承を採集する際の折口の分類案は、柳田から「独特の分類」（『柳田国男全集28』ちくま文庫 三七一頁）と評されたほどだ。また、いささか厄介なことに、別表の通り、折口は大正九年から、最晩年の昭和二十七年まで、数回にわたって自身の分類案を作り直しているのである。こうした項目名称に異同が生じるということは、それぞれが包摂関係にあつて明確な線引きが困難であることを表す。折口の真意を探るため、とりあえず、心意・周期・言語・行動・造形・階級・芸能、それぞれの伝承分類案について

概観しよう。試作図も参照されたい。（以下は、『折口信夫全集ノート編七』『全集十五』を参考にまとめた。）

〔心意伝承〕……心の上での伝承。柳田のいう「過去の生活そのものがまだ我々の心に伝わっている」（『柳田全集28』三七七頁）といったこと。全ての民俗・伝承の基層を成すもの。

〔周期伝承〕……年中行事や、一定期間ごとに行われる行事。祭祀や農事など。

〔言語伝承〕……言葉の上での伝承。昔話、神話、伝説、靈験譚、民謡、呪文、祭りの囃し詞など。

〔行動伝承〕……身体行動に関する伝承。身のこなしかたに定型があるようなもの。舞踊、演劇など。これは言語伝承と連携するものが多い。たとえば「あ

かんべ」という言葉と、赤目・舌出し行動など。

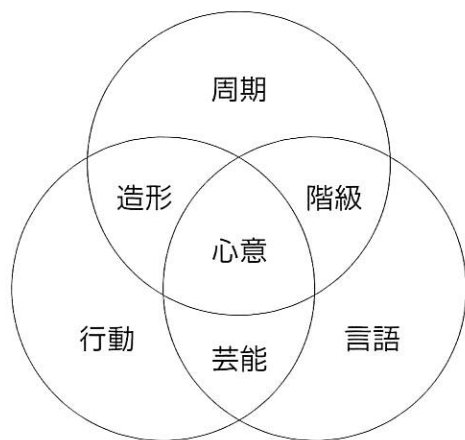
〔造形伝承〕……文字通り形作られるもの。もの作りという点で行動伝承と関係が深く、また、たとえば神社建築の式年遷宮が行われるような面では周期伝承とも関係が深い。

〔階級伝承〕……階級とは上下の格差のことではなく、ある役割を担当する組織、役職のこと。特定の神事・芸能を担当する若者組など。由緒・由来を保持し、さまざまな祭りや年中行事に関連して組織されるものが多い点で、言語伝承や周期伝承とも関係する。

〔芸能伝承〕……神話・伝説などの言語伝承を素材とし、舞踊、演劇などの行動伝承によって表現する。

芸能に関しては、たとえば「家元」のような権威の影響を受けやすい面もあるので、柳田は「民間伝承」から区別したが、折口はそうした制度をも、民俗学的視点で発生の仕方を捉えようとした（『折口信夫事典』大修館書店 三四一〜三四三頁）。

大正九年 (三三三歳)	精神	習慣	言語	表出		
昭和九年 (四七歳)		周期	言語	行動	造形	階級
昭和一二年 (五〇歳)	心意	周期	言語	行動	造形	階級
昭和一五年 (五三歳)	心理	周期 (行事)	言語	行動		階級
昭和一七年 (六五歳)	心理	周期	言語	行動		芸能



折口による民間伝承分類の変遷（『折口信夫事典』大修館書店 1988年 339頁を参考に作成）

最終的に、階級伝承や造形伝承は折口の分類項目から消えているが、それらは他の伝承分類項の中に取り込まれたわけである。つまり、図で示した三つの円の包摂関係も、折口の中では流動的なものであったのだろう。フーフープの輪を三つ同時に回転させて上から見たイメージと思えばよい。それぞれが重なり合い、影響しあい、本来は不可分に伝承してゆくのを、便宜上分類するならば、右の七項目が考えられるということである。

そうしてみると、折口の伝承分類と、前回示した、柳田の目・耳・心の三分類とは、質的に異なることもわかってくる。柳田の焦点は、あくまでも現在残っている事例の採集である。素材を網羅し、日本民俗の総体を体系づけようとした。そのための、誰もが使いこなせる枠組みが、目で見、耳で聞き、心に感じる民俗の、三分類である。ゆえに膨大な資料の採集が可能であり、それらを総合して、日本人の心性の本来的なありかたを突き止めようとしたのである。対して折口は、あくまでも伝承という運動の、性能に焦点を当てている。「心意」・「周期」・「言語」・「行動」・「造形」・「階級」・「芸能」とは、伝承運動の性能分類と考えれば、折口の意図も見えやすい。確かに「行動」・「言語」・「心意」までは柳田の

すい。

だから、折口が「発生」を論ずることが多いのも、決して「起源」を解き明かすことが目的ではなかった。過去の時代ある事象に単一の原因をもとめ、特別の事件ばかりを扱って日常・恒常的なものを無視する、といった態度ではない。肉体が日々細胞の死と発生をくり返すのと同じで、一見固定して見えるものの内部で、実は劇的に展開する生命発動の実相を、捉えようとしたのである。形式化・制度化するほどに強く働く、おおもとの生活感情が、具体的にどのように発光しているかを追究するものだった。この折口の態度は、生きた伝承の、そのナマの把握を優先させ、枠組みの曖昧さを強引に解消せずに残しているとも言える。

「心意現象」と「心意伝承」

こうした、柳田・折口両者の態度の違いが、「心意現象」か「心意伝承」かの用語選択にも反映しているのである。柳田にしてみれば、心意の問題追究は重要だが、「心意伝承」という語は危ういものであったろう。知識や技術を伝達したり、ものを手渡してゆくのと同じ

三部(目・耳・心)に対応しているように見える。しかし「行動」に内包されるべき「造形」を独立させたり、「言語」・「行動」にまたがるはずの、「芸能」や「階級」も、独立項として並列させたりと、明らかに上位・下位概念が未整理に混在するのには、単に柳田の三部に追加した、というだけではない、別の意図があるに違いない。

折口は言う、「結局、民間伝承を根本的に動かす力は何かというと、それは信仰である」(『民間伝承学講義』一九二一年『全集ノート編七』二二頁)と。つまり人間の生き死にという事実から靈魂や神の意識が催され、そうしたモノとの交渉のありさまが人間生活を形成すると見るのである。すなわち信仰心形成の連続が民間伝承であり、その連続運動のさまざまな相を、そのまま捉えようとするのが折口の狙いだったのではないか。たとえば祝詞やお経を唱え、神懸かみかかる「芸能」者を見て神秘感にとらわれたり、またそうした無形文化の管理は神の意志にかなう資格を与えられた者達が担当すべき、とする信仰から「階級」観が生じ伝えられ……、といった風に。伝承が途切れることなく脈打つためには、さまざまな性能を持った動脈が働いているイメージすればつかまえや

ように、心が伝承すると言って良いものか。良くはあるまい。遺伝子のような実体的なものを伝達するのはわけが違う。第一回目的のウルトラマンの例で見てきたとおり、事実としては、古人の心が今に伝わっているとした表現できないことが多々ある。しかしそれを科学的に説明するための実体として、心を顕微鏡でみせることは出来ない。だから「心意現象」と呼んでおくのが、無難で科学的である。これならば、現在の心模様という現象であり、また見かけ上、「過去からの遺伝的現象」と言うべき面も含むことが出来る。折口とて、それくらいのこととは認識していただろう。しかし折口は「心意伝承」にこだわった。なぜか。

折口本人による説明はない。が、幅広く概念規定できる言葉を捨ててまで「伝承」にこだわったのは、やはりどうしてもダイナミズムに範を求めたかったからではないだろうか。上原輝男の次の指摘を参考にする。「何かはどう伝えられたかを問うことと、伝わっているものが何かを考えることは差別されねばならない。前者も『伝承』を問題にしているように思われるがよく考えてみると、追究されているのは何かの時代推移あるいは何かの変遷経過であって、注視対象は何かである。注視が

何か(物)である限りにおいて、時代推移、変遷経過というものの、それは、その何か(物)がどれだけ時代をくぐり抜けてきたか、どの経路を巡ったかという以上にはならない。(中略)これに対し、後者は、明らかに、伝承に移動(運送)以上のものを見出そうとする立場なのである。伝わっているものが何か——という問いかけは、移動(運送)という捉え方ではなく流動の実質を求めることである。この立場を得たとき、注視対象は、何か(物)を伝承と一元的に融合させることが出来る」(『心意伝承の研究 芸能編』一九八七年、桜楓社 二三頁)。

これは柳田の「伝承」概念への評価であったが、折口の実践に当てはめてみるほうが意味深長である。つまり、心を物のように伝達してゆくイメージで思考するのではない。心を主語にして考えるのではなく、伝わっているのはどんな心象か、と、「伝わっている」動態を主語にし、心象事例を述語にして考える。「ある心象」を主語にすると、それに少しでも変化が起きれば、「変わる」ことなく伝わったとは言えないじゃないか」という、うるさい議論になる。枝葉末節にふりまわされて本質を捉えにくい。しかし、伝わっているのはどんな心象か、とすれば、その過程に変遷変化はあっても、現在の心象

とかつてのものとの、根源的共通性を考えることになる。ただし、上原はこれが「流動の実質を求めること」になるとか、「何か(物)を伝承と一元的に融合させることが出来る」という。これはどういうことか。

心意と伝承とを一つに見なしてみよう。言い換えれば、伝承という流動性が機能している状態を名づけて、心意と呼ぶ。そう考えてみようということになる。流動伝承していなければ、心意ではない。我々に心がある、心が働いている、ということは、即ち古人たちの心が流入し、表出しているということだ。古人達とは切り離された、絶対の個性とか、個人主義的な意味で、自由に心が作用するとは想定しない。もちろん個体ごとの違いというレベルで、個々の心模様の違いはあるが、ここでは重視しない。個人の意思でコントロールできない、群の心理を、同時代の群だけで見るとはならず、通時的・歴史的連続の群で見ると。このように折口は、静的な相でなく、動的な相において民俗を捉えるために、「伝承」の語に固執したのではなかったかということである。

当然これは仮説の域を出るものではないし、折口の意図についても、憶測でしかない。が、この視点は、人間観・人生観に、一つの新しい光をあてることにはなる。

たとえば、よく似た研究分野で比較すると、ユング心理学という集合的無意識の問題がある。深層心理というように、層構造で心を捉え、「深い領域」に、人間のイメージの元型があるとする。それが実は、表層の心理に対しても支配的に働いているという、非常にわかりやすく説得力のあるものだ。ユングと同年齢の柳田も、ほぼ同じ問題意識を持っていた。しかし心意伝承は、必ずしも心をタンクのようにばかりは考えない。むしろアンテナのイメージがふさわしい。元型論のような、内蔵された深層心理という捉え方に、別の視点も提案するのである。たとえて言うと、川の流れから海を生じ、雲と湧いて雨を結ぶ大循環にさらされ形作られる、さまざまな自然物のような、生成的なものである。天・地・人さまざまなものとの関係から、ある心模様が生じたり反応したりすると同時に、それが遺伝されたもののような様相を見せる。

折口は三三歳ですでにこう言っていた。「民族の記憶のありさまは、一個人の記憶力とは違っていて、だんだん忘れてゆくうちに、俄然として記憶の復活すること、間歇遺伝、隔世遺伝ともいふべきことがある。(中略)どこかに種が残っていて、それが五百年、千年とたつて、俄

然として芽を出すのである」(『全集ノート編七』一四頁)。いま風に言えば、ときおり不意に、古人からの着信を心に受けてしまうのである。ケータイの流行などは、利便性以前に、あたかも冥界との交信にときめいてしまう、我々の心意伝承のなせるわざなのであろう。

気概としての道徳

心意伝承研究の目的については、折口は次のように強調する。

日本の国を対象とし、日本の国の生活を対象としているから、國學ということは出来ません。もう一つ奥にあるところの、日本人の持っている道徳性というところに到達する見込みがなければ、民俗学も新しい國學ではありません。しかしながら、やっとその明かりが見えてきました。(中略)心意伝承、そういう方面の研究が、民俗学では重要であるという最後の段階だけ、やっと見えてきました。(『平田國學の傳統』一九四三年『全集二十』三四九頁)。

つまり、道徳性の追求が、心意伝承研究の目的なので

ある。右の文の中で、「国学」という言葉に抵抗を感じたものだが、それは古典文学の注釈学ではないらしく、まして、近代国民国家という概念での「国」^{ナショナル}の学では全くない。折口は次のようにも述べている。

私は最近、或処で、國學は『氣概』の學だといった。その訣は、自由な道念の基礎を國文學に置いており、それから清純な生活を民族に持ち来そうという欲望を學風としているものだ、と信じているからである。だから古典的な氣概がなくて、國學というものゝ成り立ちようがないのである。(國學とは何か)一九三七年『全集二十』二七八頁)

国文学などと言われると、どうしても古典文学の現代語訳に苦しんだ思いばかり先行するが、本来そうではなかった。理知の作業ではなく、クニを同じくする人々の氣概・情念に共鳴しようということであった。言語情調とか調子とか拍子といった語を、折口は多用する。つまり、文学を楽譜として、古今の人々どうして合唱し、心になにか張りつめたものが催されるのを感じようということだ。いわば古人の心情と一体の關係を取り結ぼうとする学とも言える。また「清純な生活を民族に持ち

来そう」とも言うごとく、それはやはり道徳性に連るものである。

あらゆる精神科学に於て最後に考えねばならないものは道徳の問題である。現在の道徳を維持しよう為ではない。今後の問題、また、それに関連して、これまでの道徳がどうして出来たかである。(中略)我々は、今の道徳を擁護するために学問をしているのではなく、その健全なものを要求するために働いている。(道徳の民俗学的考察)一九三六年『全集十五』三二四頁)。

現今は異常犯罪が頻発し、長幼の別なくいじめが蔓延し自殺者も後を絶たないが、「卑怯を恥じる心」は封印されたままである。「勝ち組」になるためには手段を選ばぬモラルハザードについても、むしろそれこそ現代のモラルとうそぶく風潮に塗り替えられている。これらもまた人間の本性であり心意伝承ではないかと居直る向きもあるかもしれない。が、素直に考えて痛みや息苦しきを感じるのを麻痺させているに過ぎない。それを本心とも心意伝承とも言うことはできない。先祖以来、我々の本性本心が、真実求めてきたのは何かを、心底見つめ直

す必要がある。心意伝承を見失った効果が、現在この世のさまざまなからだから。

では、折口の言う「健全な」道徳とはどのように求めてゆくべきか。前提として曰く、

我々の道徳に関する考えは、理性に重きを置くが、理性は感情から発している。感情を型としたのが理性で、それが道徳の外郭をなすのであるが、それは、どこまでも外郭であつて、ほんとうの力はその内の感情にあるのである。

(『全集十五』三二九～三三〇頁)

またこうも言う。

道徳に矛盾する人は、それも道徳に生きる一員ではある。つまり、新しいもたら・せんすによって、新しい道徳を打ち建てようという欲望をもった人だからである。(同三二四頁)

常識に凝り固まった頭がシェイクされるような話だ。相当柔軟な思考を要求していると言える。折口の考えが、国文学研究、新しい国学の発達を前提とするのを忘れては、混乱するだけだろう。民間伝承を「生活の古

典」(古代生活の研究)『全集二』一六頁)とも呼ぶように、広い意味での古典全般と、生身で交渉する。そこから新しいものを築くのだが、「前例がない」という新しさのことではない。「新しい」は古語では「あらたし」という。荒々しいとか洗うなどと同根の感覚で、活力に満ちた、みずみずしいような新鮮さを表す。結果、前例のない新規なものも生ずるかもしれないが、はじめから狙ってするわけではない。生々しくじーんと来るような活力への欲望なのだ。

客観的な教条・金科玉条を遵守するのではなく、道徳的興奮を発電した振る舞いに、他の人々がしびれるという關係の成立が肝要である。ひとりの美しい振る舞いだけをとって道徳とするのではなく、発電―感電という「關係」が、道徳と見る。その「關係」もまた心意伝承である。たとえ古くさい古典的なことの繰り返しに過ぎなくとも、心意伝承の興奮に打たれることがあれば、それは「健全な」道徳の「発生」なのである。